平成２５年度研究成果中間報告書《平成 25・26 年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	7	都道府県・指定都市名	福島県会津若松市
ふりがな **幼稚園** （園児数）	学校法人中沢学園（がっこうほうじんなかざわがくえん）　会津若葉幼稚園（あいづわかばようちえん）（　１３７人）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：福島県会津若松市湯川町３－７４
電話番号：　０２４２－２７－５１９５
研究内容等を掲載しているウェブサイトの URL：http://www.wakaba-youchien.ed.jp

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：１幼稚園
○研究のキーワード：「自立」「自律」「気持ちの揺れ動き(葛藤)」「幼児理解」「教師間の共有」「自己発揮」「家庭との連携」
○ 研究成果のポイント：　日々の活動記録を教師間で共有し，幼児の「自立」と「自律」の視点から整理・分析・考察することで幼児理解を深めた。また，保護者に対し，生活習慣に関するアンケートを実施し，幼稚園と家庭との連携と援助のあり方を分析した。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

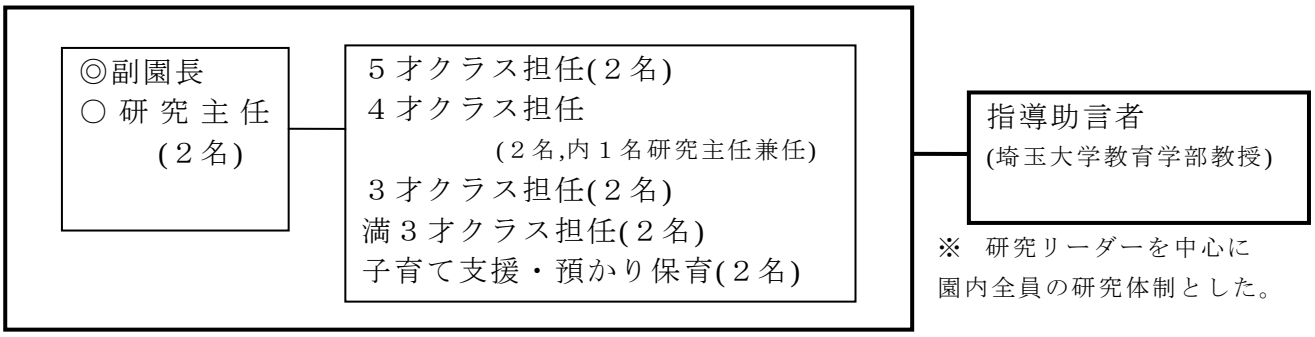
幼児の自立心，自己発揮と自己抑制の調和のとれた自律性を育てる ～幼児の基本的な生活習慣の自立、規範意識の芽生えの育ちをとらえて～

（２）研究主題設定の理由

幼児は，集団生活の中で葛藤やつまずきを体験して，我慢したり折り合いを付けたりする経験を重ね，きまりやルールの必要性や大切さに気付き，自分の気持ちを調整するようになる。大人から一方的に行動様式を教え込み習慣化させる指導ではなく，幼児自身が自他の行動の意味を理解し気付くよう働きかけ援助することが大切である。

基本的な生活習慣の自立は，自律性につながると考えられる。自立の重要性について保護者の理解を求めるとともに，家庭での生活体験に配慮し幼児の自立心を育て，幼児が他の幼児と関わり主体的な活動を展開する中で，生活に必要な習慣を身に付ける場面をしっかり組み立てていく。こうした幼児の自立心，自律性が育つ過程を把握し，教師の援助や環境の構成について見直し，指導の工夫，改善を図りたいと考えた。

（３） 研究体制　　◎…コーディネーター　　○…研究リーダー



※　研究リーダーを中心に園内全員の研究体制とした。

（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	○園内研修を行い研究内容や方法を共通理解 ○幼児の活動の記録を整理・分析・考察，それに基づく援助の工夫 ○在園児，卒園児の保護者への生活習慣に関するアンケート実施，結果まとめ ○指導助言者を招へいし，研究経過の報告と今後の研究の方向性を考える ○指導計画の見直し

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

① 園内研修会を通して研究内容や方法を共通理解

研究主題に沿って研究保育を実施し、教師全員による事例検討から研究の方向を確認した。

②日々の幼児の活動記録を整理・分析・考察し，それに基づく援助の工夫を考える。

日々の活動記録を通し，幼児一人一人の姿の読み取りを教師間で共通理解し，幼児の姿を「自立」及び「自律」の角度から捉え直した。

③在園児，卒園児の保護者へのアンケート実施，結果まとめ

家庭における基本的な生活習慣の形成に関するアンケートを全園児と小学１～３年生の卒園児の保護者を対象に実施し,園と家庭との連携と援助の在り方について分析した。

④指導者を招へいし，研究経過の確認と今後の研究の方向を考える

指導助言者から，幼児の行動の読み取り方や研究進め方等の示唆を得た。

⑤指導計画の見直し

研究主題に沿って本園の指導計画を見直し，満３歳児から５歳児の発達の段階に応じたねらい，内容，環境の構成や教師の援助について改善を行う。そのために必要となる幼児理解の充実を図った。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

・ 幼児の規範意識は，きまりやルールをただ教え込むのではなく，幼児が“その意味や必要性を理解し”“気付くようにする”ことが重要であることを，幼児の姿の“記録”“分析”“教師間の共有”によって理解し合い，実践に生かせるようになってきた。

・ アンケート結果の分析から，それぞれの保護者によって自分の子供に求めるものに違いがあり，一概には「ここまで到達しなければいけない」とは言えない。自分の子供の生活習慣が「あまり出来ていない」と思う保護者ほど幼稚園に求めるものが大きいという傾向も浮かんできた。個性と捉える一方，発達の見通しを教師が把握した上で保護者と幼児の現在の姿・目標とする姿を共有し，その課題に応じて家庭と連携しながら，幼児の生活習慣の形成を考えていくことが必要であることが分かった。

・ 現在の指導計画について，特に年齢間の発達の連続性について見直したところ，あいまいな姿で捉えていることが見えてきた。また，特に「自立」に関しては，家庭での生育環境による発達の個人差，一人一人異なる成長の度合いの広がりなどが見られ，それに応じた指導計画についても更に見直しを図る必要がある。

（２）研究成果の意義等

・ 事例の記録やその幼児理解を教師間で共有することによって，教師の幼児の育ちを見取る視点が明確になるとともに,幼児の行動や言葉を捉えた実践につなぐことができる。

・ 幼児の基本的な生活習慣の自立のためには，幼稚園と家庭との連携は必要不可欠である。個々に応じた発達の課題を適切に捉え、その時々の幼児の姿や変化を丁寧に捉えて家庭と連絡を取り合い，園と家庭の双方がその幼児を理解することで課題を達成することができる。

（３）研究２年目へ向けての課題と改善

・ 研究主題の特に幼児の「自立」に焦点を当て，幼児の主体的な行動や生活の流れとの関連から発達の姿を具体的に捉えていく。

・ 教師の想定外の幼児の姿など多様な姿への理解を深め，その際の教師の指導のあり方を反省・評価し、指導計画の見直しを行う。